

はりつけ八幡

村を救った青年名主

市役所のすぐ南、青島にはりつけ八幡と呼ばれている神社があります。

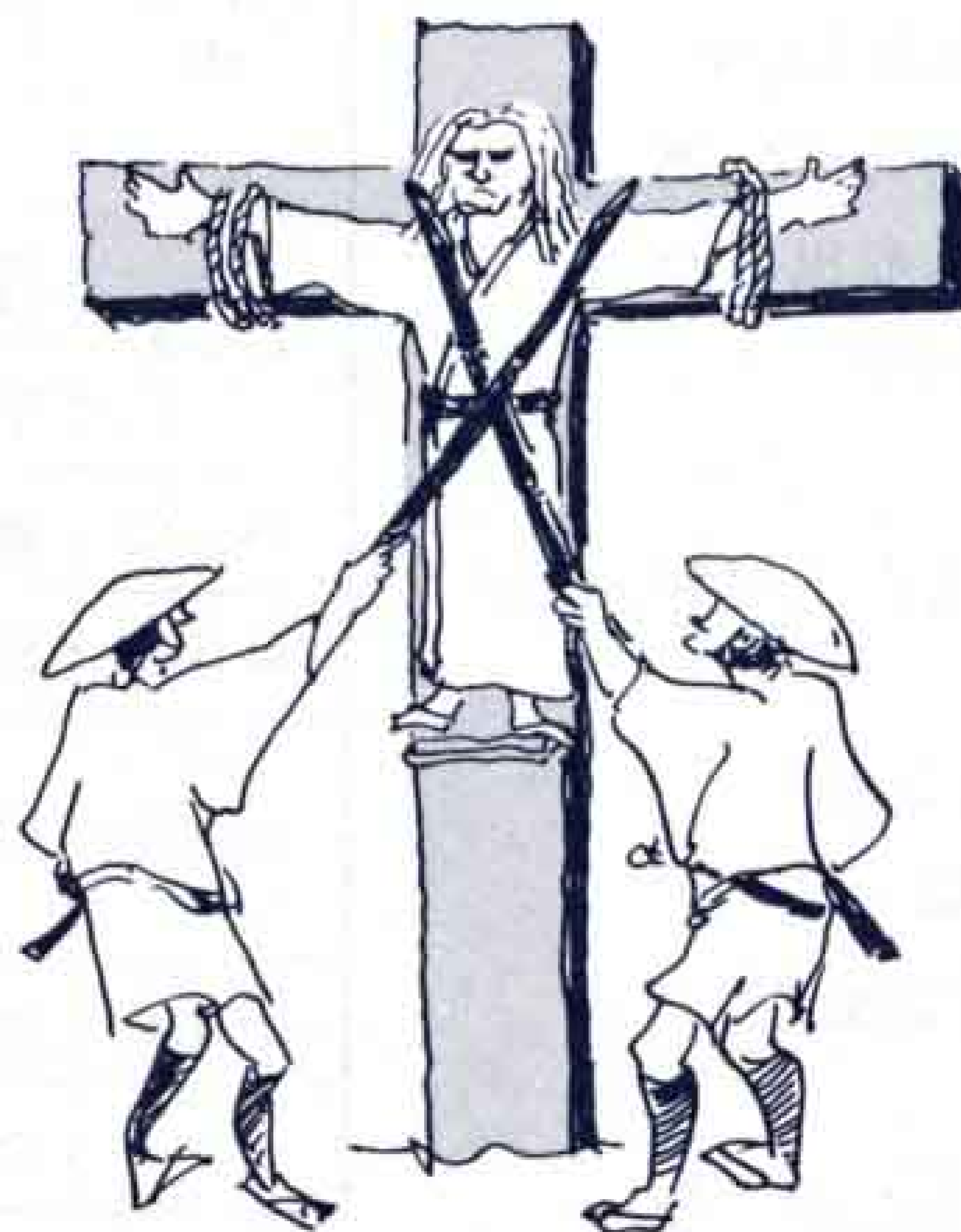
その昔、命をかけて村人を救った恩人の霊をなくさめるため、個人所有の私社として代々まつられて来たのです。



検地の役人を追いかえす

検地というのは、幕府が農民から年貢米を取りたてるために、田や畑を測ったり、とれ高を調べたりすることで、農民にとってそれは重く厳しいものでした。

延宝9年(1682年)徳川5代将軍綱吉のときのことで、青島村に検地に来た幕府の役人は、ことのほか厳しい調べて、一粒でも多く農民から取ることを考えていました。しかし、数年来の不作で、農民は自分が作った米を口にすることさえできずに苦しんでいました。その上、大津波の被害が重なって悲惨な生活を味わつ



ていたのです。
名主川口市郎兵衛は、これ以上の年貢米を課せられたら村はつぶれてしまう、何とかして農民を救わなければと悲壮な決心をし、検地の役人を一歩も村に入れませんでした。泣き寝入りするよりほかなかった農民が、ひとたび決意を固めれば、さすがの役人もかないません。

不公平な検地はまぬがれたものの役人に盾ついた者として市郎兵衛は江戸送りになり、再び村には帰って来れませんでした。はりつけの極刑となってしまうのです。青年名主が29歳の若い命をかけて青島村を救ったのです。

市立博物館 展示物

紹介

曾我兄弟の墓




けんきゅう みなものよりとも
建久4年(1193年)5月、源頼朝は諸国の武将をひきいて、富士の裾野の井出付近の狩倉(鳥や獣を狩りする所)に移って来ました。その28日夜半、曾我兄弟は工藤祐経の館に討入り、父河津三郎の仇を討ちました。兄十郎祐成はその場で仁田忠常に討たれ、弟五郎時致は捕えられ、翌29日処刑されたと伝えられています。厚原にある曾我寺には、曾我兄弟の墓があり、また近くに曾我八幡社もあります。

この曾我兄弟の話は、江戸町人の好みにあった『曾我狂言』を、江戸歌舞伎の初代市川團十郎が関東の荒事として創演し、にわかになり、曾我八幡社も江戸や京都に出開帳をするようになりました。

曾我兄弟絵馬





ごみは、私たちの日常生活と密接なかかわりがあり、その処理は一日たりともおろそかにはできません。そのごみ処理を効率的に行なうには、マナーとして5原則ルールを守っていただくことが何より大事なことです。

- 1、きめられた日の
- 2、きめられた時間に
- 3、きめられたものを
- 4、きめられた方法で
- 5、きめられた場所へ

—進めよう ごみの減量・資源化—